

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

校 自 己 評 価						学 校 関 係 者 評 価				
年 度 目 標				年 度 評 価		実施日平成30年2月16日				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策			
1	<現状> ○SSH校指定を受け2年目を迎えた。 28年度は、科学の甲子園で県大会準優勝、数学オリンピックに23名が参加するなど、「知」の意識は高まっている。 ○平成28年度に「勉強マラソン」を年5回実施し、全生徒の5割超が参加しているが、参加率がより増加するような取組がとめられる。 ○28年度はセンター試験参加者が95%となるなど国公立志望への意識が高まり、前年度を超える23名の国公立大学合格者を達成した。一方私大への合格は社会情勢があり実績は必ずしも満足できるものではなかった。 ○生徒の学習姿勢と学習習慣については家庭学習時間等が十分ではない面があり、意識を一層高める必要がある。 <課題> ○SSH2年目の取組を堅実に進める。 ○明確な高い「志」を抱かせ、実現できる環境を整備する。 ○家庭学習時間を確保する。	SSH校としての取り組みを進める	①普通科を含めた全校での講義、研究活動、小中連携等取組を推進。 ②校内活動や校外連携を進める校内体制の整備。 ③他のSSH校、理数科設置校等とのネットワーク事業の実施。 ①質の高い行事や校外活動を検討実施し、知的好奇心を向上。 ②進路指導部と教科・学年による組織的、計画的なキャリア教育を通して、将来にわたる高い「志」を育成。 ③スタディサプリ、クラッシーの活用。 ④「北高手帳」を活用して学習習慣等を確立するよう担任等から継続指導。 ⑤面談などを密に実施し、生徒が最後までやり抜く心をバックアップ。メンタルケアの実施。	①SSH関係の講義等を実施したか。 ①各行事に普通科生徒が参加したか。 ②大学や研究機関と連携した取組を実施したか。 ③他のSSH校等と連携事業を進めたか。 ①行事や活動に参加して興味関心が高まったとする生徒が8割を超えたか。 ②1年生で具体的な志望大学を目標として設定し、将来を展望できるようになったか。 ③スタディサプリ、クラッシーの継続的利用が8割を超えたか。 ④北高手帳活用で、家庭学習時間を「学年の数+1時間」以上確保できたか。 ⑤受験・学習のプレッシャー等に教育相談等で対応できたか。 ○国公立大学合格者が25名以上だったか。	①②大学や研究機関と連携を図り、SSH特別講演会や臨海フィールドワーク、さくらサイエンスプロジェクト等を実施し、普通科生徒も含めて積極的参加があった。 ③他のSSH校の発表会に参加するなど連携を強めている。 ①オーストラリアサイエンス研修やミスインターナショナルの来校等を通して、グローバルな視点や知的好奇心を高めることができた。 ②進路情報企業と連携し、講演会や模試等を通して、志望大学を具体的に明確にする機会をつくれた。 ③宿題配信や学習記録等、クラッシーの利用は8割を超えたが、スタディサプリの活用は個人差が大きい。 ④北高手帳の活用はできていないが、家庭学習の意識付けについては課題である。	A	SSH行事の深化と着実な推進が課題であり、今後も学校全体の取組として進めていく。	・生徒は進路選択という点で、実際には大学をどのような観点で選んでいるか。卒業後の職業選択も視野に入れて、目的をしっかりと考えさせるようにして欲しい。 ・ICT活用の授業は、実際には受け身の内容になっていないか気になる。		
2	<現状> ○平成28年度は1年生を対象に全校で「数理探究」として研究活動を実施し、SSH校としての活動がスタートできた。 ○数理探究を通して、生徒が自ら課題を設定し、解決する学習機会を与えることができた。 ○全HR教室の電子黒板機能付きプロジェクタ、ICTラーニングルームなどを活用してICT教育を推進できた。 ○授業アンケートを実施し、教員へフィードバックした。 ○土曜授業の推進、34単位時間割による授業時間の確保 <課題> ○「数理探究」を通して課題設定・解決能力を育成する。 ○タブレットを通してオンラインスピーキングトレーニング(OST)等の学習を円滑に進める。(1年) ○ICT活用を推進し、アクティブラーニングによる主体的な学びを進める。 ○授業アンケートを分析し、授業の質を高める。	「数理探究」を柱としたアクティブラーニング	①「数理探究」で、生徒が主体的に学習課題を見つけ、データ収集できるように、面接や個別指導を実施。 ②「数理探究」で、班内や教員との十分なディスカッションで、論理的な分析、計画的な課題解決力を育成。共同作業により、協調性も育成。 ③ICTを活用し、生徒の能動的・活動的な、学習、アクティブラーニングを積極的に展開。 ④数理探究や修学旅行の事前・事後学習の発表、ディスカッション等でICTを積極的に活用。 ⑤タブレットを活用したOST等の推進	①研究主題について、班内、指導教員とで検討、討議が十分なされたか。 ②論理的に仮説を立て、それに基づいた研究計画が作成されたか。 ②研究活動での、班内分担や共同作業が円滑に行われたか。 ③ICTを活用し、アクティブラーニングを実践した教員が60%を超えたか。 ④HRや総合的な学習の時間等でICT活用し、生徒がスキルアップしたか。 ⑤OST等が円滑に進められたか。	①②各クラス3名の指導教員が付き、各班で十分な検討及び討議を行うことができた。1年生全員がポスターセッションを実施し、課題設定・解決能力を高められた。 ③④ICTを活用してアクティブラーニングを実践した教員が60%を超えた。修学旅行事前・事後学習の発表等でICTスキルが向上した。 ⑤OSTは年間8回実施し、模試等の結果から生徒の意欲及び技能向上につながった。	A	数理探究を通して自ら課題解決に取り組む学習姿勢を育てていく。また、ICT機器を有効に活用できる環境づくりを進める。		・SSH課題研究の発表については、研究を進めるにはテーマその研究のねらいをしっかりと考えていくことが大事。 ・高い目標に向けて取り組ませようという現在の状況で、授業の理解度に大きく差が出ないような配慮をお願いしたい。	
3	<現状> ○「自律」の精神を養うべく指導、携帯電話の使用や服装などの面で、落ち着いた様子が見られる。 ○大きな交通事故はなかったが、無くすことはできなかった。 ○教育相談体制を整備したことにより、教育相談委員会の定期的な開催やカウンセラー同士の連携が図ら満足できる状況が生まれた。 <課題> ○服装指導等を一層推進する。 ○交通事故を無くす。 ○教育相談体制を充実させる。	自律ある行動と交通事故の防止	①生徒会や風紀委員も交えた取組による、健全に学習に取り組める環境作りの推進。 ②大宮警察等とも連携し、交通ルール遵守や交通安全意識を向上。 ③スケアードストレイトの実施。	①風紀委員による通信等を発行したか。 ②近隣からの苦情が減少したか。 ③スケアードストレイトを実施したか。 ○交通事故「零」になったか。	①②③風紀委員による登校指導を毎月実施したが、広報紙は発行できていない。近隣から登下校時に関する苦情は減少させることはできなかった。スケアードストレイトを実施し、自転車事故防止を意識付けた。 ○交通事故は零にはならなかった。 ①②③委員会を定期的に開催し、生徒の状況等を確認できた。研修会を実施し、カウンセラーとの情報が共有され、教育相談が機能したが、個々の教職員の意識に課題が残る。	B	日頃より生徒達自身が登下校へのマナー意識をもたせるよう委員会等を通して学校全体で取り組む。			・事故0目指し各方面と連携を ・自転車保険が4月から全員加入になる。任意の部分を、適切に家庭に周知して欲しい。 ・部活動状況、「文武両道」で両立を目指してほしい。 ・地域のボランティア(パトロール、宮原まつり)協力に感謝。
4	<現状> ○体験授業を普通科科目でも実施した。 ○小中学校へのアウトリーチ活動では、関係者から活動が評価され、新聞等で取りあげられた。 ○海外修学旅行や海外サイエンス研修、オーストラリア派遣事業などの取組を円滑に実施した。 ○科学英語講座は、長期休業中に集中講座を実施。年度末には、纏めとしてポスターセッションを実施した。 <課題> ○「地域の理数教育拠点」の役割を一層充実させる ○HPや商業施設等も活用し、広報をさらに進める。 ○国際交流事業を一層充実させ、海外の高校(台湾・オーストラリア)との連携による共同研究を展開する。 ○英語講座・国際関係講義等を充実させる。	SSH指定校として地域の「理数教育」拠点	①小学生対象「夏休み自由研究サポートプログラム」の実施。中学生対象「科学部研究コンテスト」の実施。「観望会」の実施。 ②小中学校の要望を踏まえたアウトリーチを検討 ③「HP」や「体験授業」「学校説明会」、「商業施設」などで教育活動内容を積極的に発信。	①②アウトリーチ活動で、本校生、小・中学校生それぞれの満足度が9割を超えたか。 ②小中学校と情報交換会を持てたか。 ③職員全員で広報活動を実施したか。 ○志願倍率が増加したか。	①②小学生対象「夏休み自由研究お助け隊」や中学生のための「ASEP Jr Hi」等を実施するなどのアウトリーチ活動を展開し、参加者から高い満足度を得た。 ③HPは随時更新している。 ○平成30年度の入試中間調査では本校1クラス増により倍率は昨年比で低下した。 ①②③⑤オーストラリアサイエンス研修、JSTによる「さくらサイエンスプロジェクト」によるコロンビアの高校生との共同研究、ミスインターナショナル歓迎会等を通して、グローバル人材の育成を進めた。 ④科学英語及びASEP Jr Hiの高校生・中学生によるポスター作成と共同審査、発表(英語・日本語)を行うことができた。 ⑥プログラムは実施できなかった。	A	アウトリーチ活動への参加希望者が多く、回数や内容等を検討する必要がある。生徒募集について改めて検討し、志願者増加につなげる。			

